【古典文法　動詞　識別③】

問．次の文中にある傍線部の動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

① 栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、（徒然草）

② さうなく言ひ出でたれど、何と言ふべき言の葉もおぼえぬに、折しも、（今物語）

③ と申しければ、「おのれ放ちては、たれか書かん。」と仰せられければ、（宇治拾遺物語）

④ いみじくよよと泣けば、われもえせきあへねど、いみじさに、戯れに言ひなさむとて（蜻蛉日記）

⑤ 逢坂果ては行き来の関もゐず訪ねて来こば来こ来きなば帰さじ　（俊頼髄脳）

⑥ 人々の勧むるによつて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。（おくの細道）

⑦ 日暮るるほどに、文見えたり。天下のそらごとならむと思へば、（蜻蛉日記）

⑧ つつめども色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで　（沙石集）

⑨ いまだ入りやらで見送りたるが、ふり捨てがたきに、何とまれ、言ひて来。（今物語）

⑩ 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる　（枕草子）

⑪ とて、射残したる八筋の矢を、差し詰め引き詰め、散々に射る。（平家物語）

⑫ 棟を並べ、甍を争へる、高き、卑しき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬ物なれど、（方丈記）

⑬ 男着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむ（伊勢物語）

⑭ いかに心もとなく思すらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、（十訓抄）

⑮ 脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みゐたる尼君、ただ人と見えず。（源氏物語）

①	④	⑦	⑩	⑬
②	⑤	⑧	⑪	⑭
③	⑥	⑨	⑫	⑮

【古典文法　動詞　識別③】　解答

問．次の文中にある傍線部の動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

① 栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、（徒然草）

② さうなく言ひ出でたれど、何と言ふべき言の葉もおぼえぬに、折しも、（今物語）

③ と申しければ、「おのれ放ちては、たれか書かん。」と仰せられければ、（宇治拾遺物語）

④ いみじくよよと泣けば、われもえせきあへねど、いみじさに、戯れに言ひなさむとて（蜻蛉日記）

⑤ 逢坂果ては行き来の関もゐず訪ねて来こば来こ来きなば帰さじ（俊頼髄脳）

⑥ 人々の勧むるによつて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。（おくの細道）

⑦ 日暮るるほどに、文見えたり。天下のそらごとならむと思へば、（蜻蛉日記）

⑧ つつめども色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで（沙石集）

⑨ いまだ入りやらで見送りたるが、ふり捨てがたきに、何とまれ、言ひて来。（今物語）

⑩ 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる（枕草子）

⑪ とて、射残したる八筋の矢を、差し詰め引き詰め、散々に射る。（平家物語）

⑫ 棟を並べ、甍を争へる、高き、卑しき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬ物なれど、（方丈記）

⑬ 男着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむ（伊勢物語）

⑭ いかに心もとなく思すらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、（十訓抄）

⑮ 脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みゐたる尼君、ただ人と見えず。（源氏物語）

① ラ行変格・連用	② ヤ行下二・未然	③ カ行四段・未然	④ カ行四段・已然	⑤ ワ行上一・未然
⑥ マ行下二・連体	⑦ ヤ行下二・連用	⑧ マ行四段・已然	⑨ カ行変格・命令	⑩ カ行四段・連体
⑪ ヤ行上一・終止	⑫ ハ行下二・連用	⑬ カ行上一・連用	⑭ ガ行上二・未然	⑮ ワ行上一・連用